

川村邦光著『幻視する近代空間』

青弓社、1990年、2060円

遠藤 潤

明治以降の日本において民衆の心性がどのようなものであったかと問うことは容易ではない。その原因として、まず第一に、日本の近代をとらえる困難さがあげられる。

ヨーロッパにおいて近代および近代思想の歴史は、それ自体連続的なものとして意識されていた。その一見連続する歴史の中に断層を発見していくというフーコーの「知の考古学」は、思想史の連続性に異議を申し立てるという意味で大きなインパクトを与えたのであるが、その作業において思想の組み替えが西欧の中からいわば「内発的」に生じたことは暗黙の前提になっている。

これに対して日本の近代化に特徴的なのは、それが「外からの」近代化、「上からの」近代化である点である。つまり、日本において近代化は、すでに日本に対する圧力を強めていたヨーロッパ諸国に対抗するために主として政府主導のもとで行われたのであり、少なくともこの点では西欧の近代化とは性格を異にするものである。

このような点をふまえた上で、あえて現代のわれわれの社会の根源を近代に遡ろうとするとき、歴史のなかで近代を具体的に問うていくことを避けることはできない。

「単に最新の科学技術のみならず、それを支えている諸学問や思想・イデオロギーがわれわれに快適な環境を提供してくれると錯覚し、その一方でそれらが支配・権力のテクノロジーとして機能し、自ら操り人形と化して自発的に屈従している、というパラドックスをわれわれは身をもって生きている。このパラドックスの現代にあって、社会的テクノロジーの来歴を深部にまで遡って探究することが、おびただしい歴史の残骸のなかから飛びたち、少なくともわれわれの現在を簡素で透

明なものとするための資となるかもしれない。」

(M. ローテンバーク著、川村訳『逸脱のアルケオロジー』「訳者あとがき」)

この視点を日本の近代という歴史の場において具現化したのが本書である。

日本の近代化のなかで川村氏は民衆に焦点をあて、「民衆が営々と蓄えてきた知識や行動様式」(p.18)を<民俗の知>と呼びこれをキー概念として、民衆の心性が近代化の過程においてどのように変容したか考察する。

「民俗」的な習俗が近代化の過程で失われていくことを考えると、それを支える民衆の思想もともに失われていると考えられるかもしれない。しかし、習俗が失われてもそれを支えていた民衆そのものが失われるわけではない。人が失われていないかぎり、習俗が失われたのちの思想・行動様式にはそれまでの思想・行動様式からの連続性を理論的に想定しうる。この連続するものとして<民俗の知>は考えられている。

<民俗の知>は、自律的で自ら体系を編成するものでありながら、その外部からの影響にも反応し、時として再編成される。近代化の過程で起こる新しい事象、それらへの反応は<民俗の知>によってある定型化した行為へと編成される。他方、近代化によって生じる事象、とりわけ国家の戦略によって<民俗の知>自身が組み替えられていく。本書では、この両側面についての探究が行われる。

さて、本書の全体像を見てみよう。本書は4つの章からなっている。第1章では近代化に際して<民俗の知>が人々の行為を編成したことが実例を通して分析されたのち、<民俗の知>を編成するものとして修身教科書がとりあげられる。第2章では「狐憑き」につ

いてのとらえ方が近代化の過程においてどのように変化したかを追うことで〈民俗の知〉の変容の一側面を明らかにすることを試みている。第3章では「狐憑き」が「精神病」として扱われるようになった、その現場である座敷牢をとりあげ、「精神病」監視—統治システムの形成過程をそこに見る。最終章では、先祖祭祀と靖国神社とを追うことによって、靈魂をめぐる国家と民衆とのせめぎあいが抽出される。

それでは各章の内容について詳細に見ることにしよう。

第1章では、まず最初に明治初期の「血税一揆」の分析が行われる。川村氏は、「血税一揆」がある一定の闘争形態を採ったのは、その行動が異人に対する共同体のシステムに依拠しているからであるとし、異人論を援用しながらそのシステムを説明する。それによれば、異人に対する民俗のシステムには、追放—浄化メカニズムと吸収—再生メカニズムの2つの回路がある。前者は異人の侵入に対して、彼を排除・殺害することで共同体の恒常性を保とうとするシステムであり、「閉じた共同体」を現出する。後者は異人を歓待することで共同体に異人の持つ力を吸収しようとするシステムであり、「開いた共同体」を現出する。多くの共同体はこの両方のシステムを兼ね備えているのだが、「血税一揆」では新政府の政策に対する恐怖が、それまでにすでに歴史的に形成されていた〈民俗の知〉によって一揆という形態まで組織されたとする。つづいて、〈民俗の知〉が組み替えられる具体相として、明治期における外国に対する二重の意識、すなわち畏怖される西洋と侮蔑されるアジアという意識がとりあげられる。このマクロ・レベルでの「内部／外部」と同時にミクロ・レベルでも、つまり国内においても「内部／外部」とに差異化される。国家による後者の差異化の例として、トラホームをめぐる修身教科書の記述が論じられる。修身教科書ではトラホームに対する〈民俗の知〉による治療と〈制度の知〉である近代医

療による治療とが対置され、〈民俗の知〉は迷信として退けられる。この教育により〈民俗の知〉は解体・再編成されたのである。

第2章では、近代医学の浸透にともなってパースペクティブが変化した現象として、狐憑きがとりあげられている。ここでは狐憑きについての〈民俗の知〉による理解の仕方について、近代化のなかでどのように変容したのかについて、狐憑きの「精神病」化、精神医学の通俗化の2つの過程について検討が加えられる。

まず、新聞記事において狐憑きが「文明／野蛮」の構図のもと、これまでとは異なった見方で見られる実例をとりあげている。それまでの狐憑きについての言説は、「ミクロコスモス的な身体運動論とマクロコスモス的な生命エネルギー論とを結合した状態・情況叙述の言語」によるものであったとし、他の例とともに文明開化以前のディスクールの一般的な質を見定める。「狐憑き」はそう呼ぶことで、経験的な因果論では説明不可能な事態をまるごととらえることのできる用語である。「狐憑き」においてその異常は治癒可能なものである。また、そこでは「狐憑き」の者には病者としての社会的な立場が与えられ、通常期待されている社会的役割の遂行から解放される。これに対して近代医学は、個人の内在的要因、生物学的要因に「狐憑き」、精神病の要因を求めるものである。明治以降の近代化の過程において、「狐憑き」は「神経・脳システム」の問題と「道徳・文明」の問題との2つの視点から主に論じられる。「狐憑き」が「精神病」化していく過程で、それは次第に「道徳・文明」の問題を離れて「神経・脳システム」の問題へと収斂していく。そこでは生理学的・病理学的視点が全面的に支配するようになり、「狐憑き」は治療不可能なものに見なされるにいたる。

次に川村氏はこうした精神医学が民衆に広まる様子を新聞広告に見る。当時の新聞には「精神病」は「脳病」「神経病」などの名前を与え、それを治療する薬の広告が掲載されている。ここでは「精神病」は治癒可能とされ

ているのであり、またそれらの薬が前提としている身体観には近世にみられる養生法の影響がある。ここに川村氏は〈民俗の知〉から継承されたものをみる。この広告当時には「精神病」は「脳病」という器質的な名前を与えられながらも、器官に由来する病気とは考えられていなかったのである。しかし、のちにはその病名が意味する病気へと視線が変化していく、とする。

第3章では、座敷牢が「精神病」観生成の現場としてとりあげられる。そこには2つの力が働いている。ひとつには国家による支配と管理であり、ふたつには民衆の受容である。民衆がこの装置を受容した背景には、第2章までにみたような「精神病」についての新しい見方、つまり「精神病」を不治のものや遺伝性のものとする考えがある。座敷牢への監禁は「精神病者」が不治でありまた危険であるという新しい通念に依拠して民衆が国家権力の用意した制度を自発的に利用することによって推進された。ここで学校—医療—警察という統治システムを川村氏は考える。つづいて、妄想というテーマについて「芦原将軍」と出口なおとがとりあげられる。「芦原将軍」は精神病院という管理システムのなかで国家の虚妄性を示すものになっていたとし、また出口なおは座敷牢という管理システムのなかから「再生」し、信憑性を獲得したものとして評価されている。

終章では、先祖祭祀と靖國神社とを軸にして、靈魂をめぐる国家と民衆のせめぎあいがどのようなものであったか、描かれる。まず柳田國男の祖先観がとりあげられ、その家の永続と先祖祭祀とを表裏一体ととらえる点に国家と「家」とをつなぐ忠孝一本論との共通性をみる。国家は忠孝一本論にもとづいて教育を通じて全国共通の先祖観・先祖祭祀を捏造し、民衆の文化世界を吸収、一元的な国家のもとへと再編成されたとする。また、靖國神社において国家のための戦死者を英靈として差別化して祭ることによって、そして、それを全国の学校を通じて教育し浸透させるこ

とによって、国家による「靈魂の管理」がはかられた。これらの動きに対して、民衆の側から靈魂を奪回する営みとして西田無学の新しい先祖祭祀がとりあげられている。

以上が本書の主な内容である。全編を通じて貫かれているのは、現代のわれわれが抱える問題の根底を求めて近代成り立ちへと遡及するという姿勢である。そして、その姿勢からの分析を可能にしているのが〈民俗の知〉という概念である。

民衆の感覚・行動様式を〈民俗の知〉として扱い、それを分析の中心に据えることで、習俗などの具体的行為に必ずしも表れない民衆の心性そのものへと論及することが可能となっている。と同時に、〈民俗の知〉の「変容するが連続している」という性質によって、過去の記憶と現代とが繋がって見えてくる。民衆の思想・行動様式の連続性をいったん確保したうえでその変容について論じるという著者の方法は、近代の民衆の心性を現代との繋がりの点から考える際に広く有効であると思われる。

ただ、多くの可能性を秘めているだけに、いくつか疑問に感じられた点があった。

まず、〈民俗の知〉について。このことばを川村氏は「民衆が営々と蓄えてきた知識や行動様式」(p.18)と説明するが、これだけではこの概念がどのようなものであるか明確にはわからない。本書における分析の性質上、この概念は定義されるべきものではなく個々の分析のなかで理解されるべきものとも考えられる。しかしながら、全編を貫くキー概念としてこの語が用いられていることを考えれば、語義的な説明を避けるとしても、その質についてなんらかの説明がなされてもよいのではないだろうか。

各論に目をうつしてみよう。まず第一章の「血税一揆」を考えたい。新しい現実には民衆が対抗するのにとったこの偏狭な闘争形態を川村氏は異人に対する民俗のシステムに依拠するものと考え、このシステムには排除と吸収との二種がありそれに応じて「閉じた共同

体」と「開いた共同体」とが現れるとする。この視点からすれば、新しい現実に対しても両方の反応の可能性がありえたとも考えられる。とするなら、両方の可能性にもかかわらずここでは排除のシステムの方だけが働いたのはなぜだろうか。いいかえれば、両方のシステムの分岐点で〈民俗の知〉はどのように作用するのであろうか。

第二章では、「精神病」観の生成の分析において著者は「狐憑き」に対する〈民俗の知〉と近代医学の態度を比較し、民衆のパースペクティブの変容を指摘する。しかしながら、〈民俗の知〉は徳川時代以前の〈制度の知〉である漢医学ともなんらかの形で交渉を持っていたのであり、近代化の過程における近代医学の〈制度の知〉としての特異性は、〈民俗の知〉が漢医学、近代医学のそれぞれとどのように接触していたのか、その比較を通じてより明確になると考えられる。この見地からすれば、漢医学についてはより立ち入った検討がされてもよいのではないか。

最後に、第四章で氏は「死者との共存・共闘を培った心性こそ、民衆思想のひとつの極点」(p.207)としてこの心性を国家の靈魂管理に対置するが、まさに死者との共闘を国家イデオロギーのレベルにまで高めたのが靖國の思想であるとも考えうるのではないだろうか。つまり、死者を戦死者とし生者を銃後の者たちと考えるとき、靖國の思想は生者と死者との共存・共闘となり、国家に対峙するはずの民衆思想と靖國の思想とはそれほど異質なものではなくなる。それゆえ「死者との共存・共闘」は国家の思想と民衆の思想とをわかつものとしては考えにくいのではないだろうか。

結局、これらの問題点・疑問を説明していくことは〈民俗の知〉という概念を実際の歴史のなかで鍛えあげていくことにほかならない。民衆の心性史というとらえにくいものを理解しようとするときに、川村氏のこの概念は大きい手がかりとなるものであり、その意味で〈民俗の知〉をさらに考えていくことは

われわれ後学の者にとっての課題でもある。